鹿児島女子短期大学紀要
第46号（2011）93～113頁

「新時代」の神仏世界

～ 正伝キリスト教神学の心眼でみて ～

☆

The World of NAM's Polytheistic Pantheism

～ A Catholic Theological Evaluation ～

霧島　　怜
Rei S. Kirishima

目　次

序.「新時代」の概観.　1.「新時代」の発展概歴.　2.「新時代」の神論と世界論.
3.「新時代」の「キリスト」論.　註と主な文献.　Resume.

序.「新時代」の概観.

西洋で発生した「新時代運動」(‘New Age’ Movement, NAM, 以後「新時代」と称す) という精神的な風行が文化的な現象であり，現代精神文化の大主流をなす一神教，特にカトリックとギリシア正教の世界観とその価値観に対して歪曲，誹謗と悪質な攻撃をあらゆる方面から強めている．その性質と発想が極めて曖昧で，人の野望と永福切望と絡み合うため識別し難い．そして，科学信仰と同様に，非常に魅力的で努力を求めない生き方を提供しているため，病んでいる現代人，特に若者の心を蝕みながらその真福に致命的な打撃を与えている一種の精神的なウィルスである．

この新風行の雰囲気と精神状態をお正月の福袋の売り場，オリンピクやサッカーのワードカップの開閉式，有名な歌手たちのライブ，初詣や大祭りの騒ぎに譬えることが出来る．この運動の指導者たちを初め，最後の信奉者まで皆が魅惑的な眼つき，笑顔と優しい言葉で人に近付き，誰もが気の向くままに好きなだけの幸せ，恋愛，学識，秘伝された神知，極めて珍しい悟り，社会的な成功，合同結婚式，神前結婚式，ホテルでの教会結婚式，教会での多神教徒の結婚式，仏葬，神葬，死後霊との交流，死後の慶福,「光」である神仏との親しい触れ合い，利益をもたらす宿命転換と諸種の儀礼を利用することに因って人生万事を恣に楽しむことが出来るとあらゆるマスメディアを通じて伝えている．そして，飽きた時に，今まで信頼して使った宗教，哲学，科学や儀礼を止めても悪影響が一切ないだけではなく，気が向いたら何時でも新しい信教，哲理，諸種の進化論，科学万能論，儀式，霊感力，様々な内観，愛，宿命転換方法，名声，超能力，浄土，成仏や天国での永福の確約をお祭りの雰囲気の中で何度も手に入れることが出来ると新時代の最先端科学者は四方八方に宣伝している．

「新時代運動」の根本教理，精神的な風景とその雰囲気は下記の通りである[(1)]．

第一．「新時代」は万民平等，万教平等，神仏梵天の普遍的で限りない慈愛と万人救済を建て前に

各地の精神文化の主流をなす既定大宗教の世界観とその価値観の「不合理性」と堕落からの脱却を目指すと共に，自由(つまり，本位気儘)に生きる人間として自然で当たり前な私利私欲を充たす社会の新秩序，慾の恣に自作した自他の永福を目的としている．この展望は私利私欲を最高の価値とする人々を魅了する似非宗教的な風行(Para-religious milieu)であり，勝手気ままの思想と貪慾錯乱の文化である．

第二．新時代の唱道者は世界の既定大宗教の諸聖典とその定理を無視し，聖典外書，特に古代秘伝教の諸書，近代神知学会(Masonry)の論書，交霊媒介者の啓示等を正伝と見なす．このような秘伝知を気の向くままに取り入れ，現に地域の主流文化，特に絶対一神教系の価値観，学問と社経的な生活様式の秩序と権威を斥け，恣に転換(Cultural paradigma shift)しようと手段を選ばないで全力を挙げている．

第三．欧米型の「新時代」の信奉者は正伝キリスト教の聖書，聖伝，信仰の教理と人倫を否定し，多神教的と汎神教的な秘伝教理，交霊会，霊媒会，内観，神懸り儀式，似非臨死体験の啓示と反一神教的な進化論の妄想を真知とする．特にキリストとその教行証の大義及び歴史的な役割を再解釈する．

第四．超心理学，心霊学，諸占術，催眠術，交霊術(神懸り，霊懸かり)，黒魔術，諸呪詛術，輪廻回顧体験，似非坐禅，ホリスティック黙想会，臨死体験会等の秘伝神智学的な儀式を「真知」を得るために効果的で最高の方便と見なす．そして，この真知の真正な啓示，超能力と自分らしい幸福を獲得するために，幻覚，精神分裂又は錯乱症状，身体感覚と自己自覚の喪失，自己意識の溶解感等の現象を引き起こす各種の薬物を手法として頻繁に用いる．更に,「進歩」に後れたくない大学，会社や学校での講演を初め，既定宗教，特に正伝キリスト教から分かれ，多神教的な信念を取り入れる宗派(新興宗教)の寺院等の集会場で行われる黙想会や研修会にもその思想と手法が様々なかたちで侵入している．

第五．新時代信奉者の秘伝神知と占星術によると,「魚座(魚神)時代」と呼ばれるキリスト教的な価値観の終結と共に「水瓶座(水神)時代」と称せられ，世界に通用し得る新精神の秩序，新価値観と新権威時代の到来が不可避的に差し迫っている．しかし，現代の大文化と来たる新時代文化の世界観とその価値観とは多いに異なるため事実上で共存し得ない．よって，当運動の信奉者は新時代への大転換とその整備を急がなければならないし，彼らこそ，新人類創価の先駆者と主導力であると主張する．

第六．新時代の宗教哲学的な根源が古代の諸秘伝神知，不二論的多神教，その秘伝と秘儀にまで遡るが，資本主義の美化，その経済的な搾取と人権無視，ヨーロッパの既定大宗教の教理的争いと堕落，大宗教が放置した貧困社会，技術発展と自己本位的な私利私欲の追求が生んだ人心の空白化と砂漠化は間接的な主因である．そして，ヨーロッパで17世紀に再発した「自由人の秘密諸結社」(Freemason lodges)は新時代の直接で主な発祥源となり，その教理の原本と規準であり，主導的な役割を果たしている．

要するに，新時代運動とは，古今の反一神論的，反正伝キリスト教(特に反カトリック)的，似非キリスト教的，多神教的，汎神論的，無神論的，無神信的，相対論的な哲学と道徳，遺跡の捏造(例えばピルトダウン原人)と空想(四肢で歩く猿人たちの社会)科学に基づく進化論，一神教的進化論，秘伝諸宗教と神仏混合を恣に組み合わせた教行信証(Syncretico-Polytheistic Pantheism)である．

1.「新時代」の発展概歴.

新時代発生の第一源泉は言うまでもなく，17世紀に現れ始めたフリーメーソンの秘密結社である．そして何よりも，現代メーソンの母胎と典型であり，1875年にH.ペトロフナ・ブラワツカ(Helena P.Blavatska)によって設立された「神知学会」(Theosophic Society)というメーソニック結社が今も，一切世界の超絶主に対して謀叛を扇動する一方，陰謀と極悪の王,「光り輝く大王」('Lucifer')を崇拝し，彼の秩序の普及に務め，秘伝知，儀礼と特訓を通じて世界各地で活動している．ブラワツカの啓示によると，リムール人種とアトランタ人種文化の時代が終わり，アリァン人種文化の五副期(仏陀，ヘルメス，ゾロアストラ，オルフェウスとイェズスの霊性文化)も結末を迎え，今は神知学会の精神文化の時代に突入しようとしている．当学会の第二の会長であったアニー・ベサー(Annie Besant)は1906年に第六副期の救世主がこの世に生まれたと宣言した後，学会は分裂した．さらに，1925年にジッドゥ・クリシナムトリを「救世主の化身と救済的主導者」の座に就かせることに失敗した後で分裂が深まり，神知学会は四会に別れた．

先ず，R.シタイナー(Rudolf Steiner)は地球で発現する一切の思想と活動が，地球を囲みながら隅々までに浸透する「霊気層」(Akashic Realm)の中に保存されていると主張した．彼は「幽隠的精気界」(「霊気界」,「霊気層」, Etheric Realm)とも呼ばれるこの霊気層内に記録されている宇宙万物の諸言行とその道理を真正な啓示の根本とした．彼によると,「救済(キリスト)的霊知」がそこから出現し，地上でイェズスとして生まれ変わり，十字架上の死によって人類の救い主となったと主張した．この出来事を「ゴルゴタの神秘」と呼び，自ら発足させた「人知学会」の根本的な教理とした．

次に，A.ベイレィ(Alice Bailey)はイェズスとして活動していた救済的霊知(キリスト)が必ずこの世で新しい化身として再臨するであろうが，その前に天地万物に破滅的な異変と霊的目覚めが起こり，秘伝神知に通じる会員が「キリストの再臨」を速めなければならないという信念を自分が設立した「奥義学校」(Arcane School)の根本教義とした．

更に，エドナとガイ・バッラルド(Edna and Guy Ballard)はイェズスの十字架上の死ではなく，昇天したゲルメィン聖師の啓示と人間界内の不和を焼却するゲルメィン聖師の紫炎によって各人を救う「我れ在り会」を立ち上げた．

新時代の第二の源泉は19世紀前半に活動していたP.パルクフルスト・クィムビ(Phinas P.Quimby)を始祖とする「新時代思想」('New Age Thought')である．彼によると，我々と全く同じ人間であったイェズスは「真理」とも「英智」とも「キリスト」とも呼ばれる本来「無位格的(アペルソナル)な霊知」を見出し，これを諸病の治癒に活用していた．彼は邪信(邪見)を諸病苦の原因と見て「救済(キリスト)的心霊力」を以て治癒できると主張した．

上記の組織から現代の新時代の第一世代が芽生えた．先ず，人知学会の教義，特にそのキリスト論と人間論を土台とするD.スパングレーによると，本来救済的な大教師たる「無位格的な霊知」が近い将来に人類の中で再び生まれ変ると論究する．奥義学校の教理，特にA.ベイレィが著した『キリストの再公現』を自分の世界観の規範とするB.クリム(Benjamin Creme)は，仏教が待ち望んでいる弥勒仏とキリスト教が待望しているキリストの再臨を同義異名の出来事と見なした．アリァン人種の本来救世主であるこの「弥勒の霊知(キリスト)」の新化身の預言が1977年に実現され，1982年にテレビ放送を通じて全人類に公示された後，精神的栄福と経済的繁栄の時代が発動するはずだった．エリザベツとマルク・プロフェット(Elizabeth and Mark Prophet)は「我れ在り会」の教理を規範に1958年に「普遍栄勝の教会」(The Universal and

Triumphant Church)を立ち上げた．主人マルクの死後に教会の指揮を取ったE.クレル・プロフェットは，ブラワツカ大師の出現を機に始動した真理と幸福の新時代の定理，特に，母性的神，万人に内在する神性，イェズスと同様な大師達，イェズスの死の非贖罪性と非救済性，ゲルメィン大師として生きた無位格的な霊知の紫炎の救済力，自分のような現代大師達の啓示を不可謬の教理として唱道する．更に,「新時代思想」の哲理を規範にミルツーとチァルス・フィルモル(Myrtle and Charles Fillmore)が設立した「キリスト教統一の学校」(Unity School of Christianity)，E.ホルムス(Ernest Holmes)が立ち上げた「科学宗教の統一教会」(United Church of Religious Science)，眠る預言者と呼ばれるE.ケーイシー(Edgar Cayce)が創設した「学研と開悟を追求する協会」(Association for Research and Enlightenment，略してA.R.E.)，カリフォルニァ州の「イセィレン共同体」(Esalen Community)，スコトランドの「ファインドホーン共同体」(Findhorn Community)，ニューヨーク市の「オープン・センター」,「精神最先端の国際仲間会」(Spiritual Frontiers Fellowship International)とスイスの「モンテヴェルデ共同体」他のような組織も新時代活動の焦点であり，その精神の普及に大金と力を入れている．又，高額費用のかかる合宿修練会と聖酒の儀礼を随従者教育の中心とし,「再臨の救世主」と呼ばれる文鮮明が創立した「世界基督教統一神霊協会」(略して「統一教会」)，牧口常三郎が創設し，諸邪教の排除,「宿命転換」と「人間革命」を押し進め，政教の自由を制限する「創価学会」，大川隆法が1986年に設立した「幸福科学」のような新興宗教と神仏政経の新組織の殆どは新時代運動の日本的な複流であり，その普及手法を共有し，自分達の人間観とその価値観の伝播に膨大な金額を注入している．

2.「新時代」の神論と世界論.

新時代論弁家の殆どは，永遠で絶美と万徳の極まりない超絶的創世主(天主[特註])の存在を否定している．その代わりに東洋諸宗教の最高神仏，特に宇宙万有を身体とし，その主霊であるヒンズー教の超徹的な「梵」や万我物事象をして活現する非位格的で無定性的な「大日如来」,「無量光如来」,「仏性」や「御いのち」と称せられる「仏様」に酷似する「神」の概念を有する．かくして，新時代運動信奉者の大半は「神」を内在的で非位格的な大霊力(Apersonal and immanent spiritual Energy)，全てを生かす神的で無位格的な大霊我(All-vitalizing impersonal divine Soul)，万物に遍在する神聖な原理，又は万有千化の心奥を通徹する霊的な大意識(All-penetrating spiritual Consciousness)や超意識(Super-Consciousness)として理解する．この神は一切に内在する根源的な生命力であり，存在性とその徳力の本性において超越性を欠き，万有万象の内に一つの絶大な存在であり，徳力と質量の面において第一で最大の妙霊に過ぎない．新時代運動のある伝道師達はこの「神」をこう描く．

『「神」という名称よりも一切の限界と知的把握を絶する「カ」,「一」,「全」,「存在」,「理性」(精神,心)や「源泉」と呼んだ方が正しい.…我々は神の一部であり,神と共に存在する.「我々は神ではない」という信仰は現に唯一の罪である.〈PMH.アトウォテルの文〉(2).空気が物質界にとって重要であるように,神は霊界にとって重要である.神は命であり,光であり,時であり,空間であり,生命の原型であり,物質界の勢力であり,総ての価値の心髄であり,在りとあらゆる存在の本質であり,太陽を生かす根源であり,総ての愛と光の本源であり,万物の中核であり,無辺際の光明と絶対的な愛の焦点であり,宇宙万物の大生命力である.…神は愛であり,愛は光であり,神は(総ての存在を)愛する光である.〈K.ウィリャムスの文〉.…神は神学を気にしない．神は我々の心を見ている〈牧師H.ストームの文〉.…ただ神のみが現の真実であり,そして神は愛である.神は全ての存在を無限に愛する.神は全てである.〈L.スチュアードの文〉』(3).

そして，正伝キリスト教の理解と違うが，新時代が宣教する神の「三位一体性」について言及する新時代の先駆者もいる．例えば，E.ケーイシーは神の三位一体性についてこう論説する．

『人間的眼識で見る限り，聖父，聖子と聖霊という三位一体的神性が一つを成す三次元的な世界であり，実を言うと三次元的な構造を有する「大霊知」であり，「キリスト的，即ち救済的大霊知」である．しかし，人間的眼識を越えて観ると，「神性」の世界に三次元だけではなく，より多くで複雑な次元があると悟る．何れにせよ，「神性」を三次元的な大霊知として把握しようとも，多元的大霊知として把握しようとしても「キリスト」はこの「神性」の本質的な一部ある．…そして，この救済的大霊知の本体は「父」であり，キリスト的大霊知の「理性」・「心」は「子」であり，キリスト的大霊知の「霊力」は「聖霊」である』(4)．

更に，宇宙万物はこの神聖な大霊力の個的で多種多様な「燐光」(‘spark’)であり，神体の一部(分身)であり，その活現体である．最も単純な構造を持っている無機物質，かなり高度な進化を成し遂げた人類，そして最も複雑で精妙な万霊に至るまでの諸存在の「懐」，その生成化育の指導力がこの神の他にない．物質的な宇宙の諸相とその神的な霊界の総てがその本性において単一の大生命体(Monistic Organism)であり，相互に親交する無数生命体の大家族であるという考えは新時代信奉者の通説である．この運動の代表的で熱狂的な論弁家であり，E.ケーイシーの誠実な門弟であるJ.ウァン・オーケンは便宜上で「神」と呼ぶ非位格的な大霊力に因る宇宙万物の創生とその秩序の創設を下記の如く説述する．

『秘伝によると，宇宙万物が初めに物質から創造されたのではなく，霊態として先在していた．我々の意識に似ているが一切の限界を超えた「無辺際意識」(神)こそ，自己の永遠存在の或る時点で自分を顕したかったから考え始め，想像をし始めたことによって自己内に潜在していた勢力を解放し，光，音，星，木等を創生し始めた．…この創生主は…「他人にしたことはあなたにもされるであろう」という普遍法を創設したが，それは罪悪の報罰ではなく，自己教育と開悟の方便として意図されたのである．これは「因果法」であり，「業報法」である．…しかし，業の報いが人間を含める霊界において「処罰的な果報」ではなく，個体の「心内記憶」であり，自己発展の教訓である．』(5)

このようにして，「神」と宇宙万物は存在の根底において同質的である．宇宙全体とその諸力は「神」からの流出であり，分霊であり，各々の我・物・事象が「神」の燐光として神聖な存在である．そして，万我万物は「陰」又は「陽」として存在し，特に人間以上の者はこの神の生命の「波動」又はその霊気の「伝波」によって活かされている．それだけではなく，各々の存在は類似波を発しながらお互いに交信したり，影響を及ぼしたり，それらを自覚したり，自分の霊気波長を他者に合わせたりすることが出来ると考えられている．そして，この神的で遍徹的な生命力の波動こそ，無機物質の最低層から完全な最高霊力に至るまでの万物の進化と発展の主導力である．更に，宇宙万物の多様な進化こそ，この大霊力活現の不可避的な勝流であり，万我物の各々も又この大霊力の「神知」を自己発展の究極目的としながらこの世で活動している．そして，宇宙万物の各層，特に人間界における進化の担い手とは，各人の神格化(「神」に変成する)を究極目的とする自己本位的な輪廻転生であると新時代は力説する．

更に，新時代の多くの伝道師達が一神教の聖位格的で隔越的な天主に対して，非位格的な大霊力の一活現であり，母権制的である「大地神」(Mother・Goddess Gaia)を崇拝し，神聖視する．新時代の一種である様々な「動物保権運動」(例えば，‘PETA’, ‘ALF’ や哲学者 Peter Singer)は動物を家族の一員と『パソナリティを本有する者』と見なし，ペットや動物の生活環境美化に多額のお金を惜しまない一方，世界中で様々な悲惨な窮境に

ある社会弱者を平気な顔で無視し，重症の心身障害者と数ヶ月の赤ん坊を最高の学識に基づいて『人格のない物』と捉え，人間胎児を単なる進化した「物質的な組織」と見なす[6]．そして，超越的な天主，その普遍的な秩序と神法を社会秩序の規範とする一神教文化の価値観を人間の尊厳，自由と自己完成に反すると主張する．彼らは天主を否定したり無視したりする者，自己本位主義者，似非宗教者，ご利益宗教者，人間崇拝者やあらゆる偶像崇拝者の心を引き寄せ，位格的な超絶神(Personal Absolute God)無しの永福と救済を最高で人間らしい生き方として賞賛しながら唱道し，自己本位的な満足を基に地上楽園の建設を究極の目的とする．

要するに，新時代の世界観は東洋，特にヒンズー教精神文化内の一流である絶対不二一元論のヴェーダーンタ，不二一元論と密教系の仏教，そして何よりも新プラトン的，ピタゴラス的，オルペウス教的な神秘主義，エレウシス秘儀，ユダヤ教系の秘伝カッバラー(Kabbalah)，古代エジプトの秘教，古代メソポタミアの秘儀，初期の似非キリスト教系の秘伝(「ルカの秘伝福音書，ヨハネ秘伝書，トマスの秘伝福音書，アダムの黙示録，使徒ペテロの黙示録や使徒パウロの黙示録等の七秘伝書を聖典とするグノシス)，唯物論的な進化論と科学信仰主義の世界観を各人や団体組織の本位に随って融合したものである[7]．そして神を無限の宇宙に内在する非位格的又は無位格的な大霊力・妙霊力(Pantheism, 又は Panentheism)として捉え，それを万物の本源，本質と進化の原動力と見なす．

一方，正伝キリスト教が示す100％で全面的に非現象界的，非物質的，一切の神聖と善美徳を絶する三位一体的な天主の理解(三位一体的な超絶神，Absolutely Transcendental Monotheism)[8]は新時代の「神」の理解と全く違う．正伝キリスト教の哲学と神学によると，宇宙の万物事象が天主からの流出，天主の分霊分身，天主の生命力の活現成や「燐光」ではなく，全く異性異質的な存在である．宇宙万物と天主の相互関係という立場から考えた場合，天主は100％の自由意志と無償の恵愛を以て自分以外の絶無から一切の世界とその万我物事象を(“ex nihilo Suoi et subiecti”)創造し，保持し続けているのである．この創世主は一切の我物事象を全面的に隔越しながら神秘的な方法でどこでも臨在し，万物に与えた命を養濡しながら支配する「三位一体」的な者である．被造物として天使と人間は「神(天主)に象られて創造され」，神福参加に招かれているが，天主自体に永遠に成り得ないのである．各人の救いは各自の気随の輪廻転生ではなく，三位一体的天主の無償恵愛と正義，イェズス・キリストの贖罪的な生涯，罪科の赦し，各人の自主的な罪の償いと神恵との協力，総じて各人の「愛天愛人」の生き方に順じて行われている．こうして，天主と宇宙万有とは同性同質的でなければ異性同質的な存在でもなく，永遠に異性異質的な存在であるが，万有は天主の恵愛と正義の支配範囲から一瞬も一寸も永遠に離れることはない[9]．

そして，仏教が主張する同時超徹的で無定性的又は超(非)位格的，あらゆる現象界の本末である「仏」の理解(Panentheistic, 又は Pantheistic Transcendentalism)と新時代の「神」の理解ともやや異なる．とは言え，新時代の「神」と仏教の「仏」[10]の性質の理解は非常に似ている．大乗仏教の「仏様」とは，一切劫界をありのままに在らしめ，一個一変をして活現成する超徹的な御命(力)である．一方，宇宙万物の一個一変はこの仏の物質的，動植物的，人格的や霊的な活現成あり，つまり，「ミニ仏」である．仏様と宇宙万物が永遠に固定した「性」，「格」や形態を有しない無定相的，無定性的や無定質的な存在である．そして，仏様と万物の本力が量と性格において異なるが，存在の質において根本的に同じ(同質的)であると見做されている．こうして，新時代の信奉者は「神」を多神教と汎神教の信徒の如く，者・動植

物や徳力をして自分を現す現象界内の絶妙で絶大な存在として理解して拝む.

3.「新時代」の「キリスト」論.

新時代の随従者は様々な交霊会，人為的な臨死体験や過去輪廻の回顧会等の秘儀中に獲得した新啓示を受けて，現代世界の一神教的文化とその価値観の撲滅，霊界における終末的大決戦(Armageddon)，現世の天変地異と「宇宙戦争」，地域的戦争やテロを前兆とする世界破滅(Cosmic Catastrophy)と新人類の輝かしい大隆盛の新時代が眼前に迫っていると力説する(11)．とは言え，この運動の唱道者達からみれば，カトリック教会とギリシア正教及びプロテスタント一部の教義，特にイェズス・キリストの神性，彼の贖罪的と同時に救済的な教行証，死者界からの一回限りの復活(単なる「甦り」，つまり，本来不死不滅の人魂は黄泉之国から現世の人体に戻るのではなく，各人の生前身体が不死不滅・不朽不老に変性され，生前と同一の人魂と一体として永存する)，一回限りの昇天と最後の審判を行う為に一回限りの再臨，つまり，歴史におけるイェズス・キリストの前代未聞の役割を中心とする教行信証が来たる新時代価値，その伝播とそれに基づく教行信を妨害し，相容れないものである．何故かと言うと，現代人の恣の進歩とその究極目的である各人の自己本位的な神格化(神々となること)の達成を防止する古くて反科学的な文化として見做されるからである．だから正伝キリスト教系の文化を速く壊滅させないと新時代が目指す地上楽園の到来が遅れるだけではなく，多くの人々の幸福と救済に致命的な弊害が生じると新時代は主張する．以下，新時代の本音を露顕する彼らの「キリスト論」の根本定理を説示する.

先ず，新時代運動の論弁家は「キリスト」(救済的霊知)と「歴史的」なイェズスとを区別する．インターネット上で新時代宣伝の最前線に立つ K.ヴィリァムス氏は，当運動の絶大な権威を誇る E.ケーイシー氏の見解とその論理をこうまとめている.

『人間的な眼識でみる限り,「三位一体的神性」は一つの現実を成す三次元的な大霊知である.…救済的霊知(キリスト)がその三次元的な大霊知の一次元であり，この大霊知の理性(心)として御子である.…何れにせよ,神性を三次元的な大霊知として把握しようとも,多元的な大霊知として把握しようとも救済的霊知(キリスト)はこの神性の本質的な一部である.一方,〔歴史的な〕イェズス〔の魂〕は神たる無辺際力が宇宙万物を創造した瞬間に他の諸霊魂と共に創造された個霊であり,他の霊魂と同様にこの神的総合意識の人間的な個現〔人内の神知的燐光〕である.…しかし,それは救済的霊知(キリスト)が被造物であるという意味ではない.救済的霊知(キリスト)ではなく,イェズスの霊魂は被造物である.救済的霊知(キリスト)は霊的次元において神たる無辺際超意識との永遠和一(be at-one-ment)である.イェズスの人魂はこの神的な無辺際意識との完全な親和に至り,全面的な意思疎通の状態(be at-one-ment)に到達したから救済的霊知(キリスト)に成った.…この救済的霊知(キリスト)とイェズスの人魂との完全な和合(疎通,親和,be at-one-ment)こそイェズスにおける神性と人間性の独特の一体を成す.…「救済的霊知」と成ったこのイェズスはあらゆる人魂の本来目的を達成するために人々に示された「神」の働きの主要な道具である.…彼は「あなた達皆は神々である」(ヨハネ福音書,10.34)と我々に教えた.又表現を換えれば,あらゆる人々は彼と同様に,各々の身,心と霊において神に成り得るのである.…更に,旧約聖書の創世記に登場する「アダム」はこの「救済的霊知(キリスト)」の最初の人間的な受肉(初化身)である.…イェズスはアダムの堕落の道程を自らの生き方によって逆行した.すなわち,自己救済の道として歩んだ.…イェズス・キリストは罪の影でさえ有しなかったということを信じている原理主義的クリスチャンにとって,人祖アダムとして生き,活動していたキリストが罪を犯しただけではなく,人間として原罪の作者であるという主張が如何に衝撃的であるか理解できる.だが,(E.ケーイシーによると,)イェズスとしての救済的霊知(キリスト)が罪を犯し,罪の汚れがあったと言うのではない.救済的霊知(キリスト)がイェズスという個

人的かつ宇宙的な発達と向上の段階において，極微の欠陥もなく，神に対して完璧に従順であり，神たる無辺際霊知との完全な和と心の疎通があった．…救済的霊知（キリスト）が地上で何回も輪廻転生していたという考え方がE.ケーイシーから始まったのではなく，エビョナィツ（Ebionites），サマリタンス（Samaritans），エルカザィツ（Elkasites）とナザラィツ（Nazarites）というユダヤ教と初代キリスト教の或る派の見解に見られる．…E.ケーイシー氏の史料によると，人祖アダムとして生きていた救済的霊知（キリスト）がイェズスとして再出現（輪廻転生）し，救世主となる．結局，この救済的霊知（キリスト）がアダム，エノフ（Enoch），メルキゼデック（Melchizedek），ヨゼフ（Joseph），ヨシュワ（Joshua），イェシュワ（Jeshua），そして最後にイェズスとして地上で生まれ変わった．…今度，この救済的霊知（キリスト）がいつ再臨するのか．…E.ケーイシー氏が残した記録によると，救済的霊知（キリスト）は既に人間として1998年に生まれ変わり，地上で生きている（読書文，2441-4）』[12]と．

更に，K.ヴィリァムス氏はイェズス・キリスト，釈迦牟尼仏，仏性，大霊知力（大意識）と救済的霊知（キリスト）の相互関係と人類の究極目的について語るE.ケーイシーの別の文を紹介する．

『人々の中で聖別された者としての「キリスト」に関する聖書の言葉は各人が本有する「神的霊知」を指摘する表現である．かくて，イェズスも釈迦牟尼も，万代万人に内在する神性〔つまり無限霊知力〕を示現したかったから「キリスト達」〔我々を救う神的霊知を有する者〕と成ったのである．この神性は仏性（法性，（Dharmakaya），梵，諸霊界の「共通無意識」（普遍意識）とも称せられる．そして，それらのキリスト達は獲得した人間性と神性との和一が万人の手が届くものであり，万人の究極目的である』[13]．

同氏も又，イェズスが自分の全人生を通じて救済的霊知（キリスト）とも呼ばれる「救済体得の能力」・「救済の手本（曼荼羅）」（Christic Pattern）を見事に実現したことによって，あらゆる人々の自己救済の最高の手本と成ったという事を別の箇所で次のように記す．

『「自己救済実現の能力（クリスティックパターン）」は個人の宗教や信条と一切関係なく，可能態として万人の人間性に内住する．これは生き方として表現されるのを待ち，我々の創造主との潜在的で完全な一致を示現するものである．この「自己救済実現の能力」も亦，人間の霊魂に生得的に刻まれ，「神」との和一に至った魂の自由決行による霊的な「開悟」を待っていると説かれている（読書文，5749-14）．この「和一」の実現度合いが一人一人の（死後）運命を左右するものである．…イェズスは我々のような者であり，我々も亦，彼と同じような者に成ると予定されている』．さらに，E.ケーイシー氏によると，『「キリスト」とは「普遍的な神知（意識）」であるが，「イェズス」とはその神知の「実現手本」である．…イェズスは人間性と神性との一致を理想的に実現し，自分の生涯を通じてこの一致を公現した者である．…こうして彼は我々にとって生き方の理想的な模範となったのである』[14]．

汎神教と似非キリスト教系文化の影響を受けて育てられた新時代系の臨死体験者が出会う「キリスト」は自分の名を名乗らないだけではなく，多神や多人に変容する本来無神格的で無人格的な存在である．このキリストは神の無償で公正な恵愛，永遠の賞罰，善悪と悪魔の現実，悔い改めの必要性，死後と最後の審判，イェズスの贖罪的救済と復活，神恵への個人協力，善悪に対する自己責任，人間の本質的な非神格性と『私を愛する者は私の（すべての）言葉（掟）を守る．…私を愛さない人は私の言葉を守らぬ（ヨハネ，14.15-31）…行け，諸国の民に…私が命じたことをすべて守るように教えよう（マテオ，28.19-20）』という歴史的なイェズス・キリストの教行を公然と無視したり，歪曲したりする．更に，このキリストは正伝キリスト教が2千年を通じて教行信証してきた「福音」的真理について黙殺したり又は平然と正反対のことさえ教えたりするのである．M.トマス・ベネディクト氏は臨死体験の時に逢った「キリスト」をこのように紹介する．

『イェズス，仏陀，クリシナ，曼荼羅，原始的象徴や心象に変容していた「光明」と会話する．M.トマス・ベネディクトはこの光

明に自らの正体を明かすように願った．すると，この光明は，人がこの光明と顔を合せる時に，この人の宗教的概念に順応してこの光明を感知し，意識すると答えた．だから，仏教徒は仏教的，…カトリック教徒はカトリック的な概念範疇を以て同一の「光明」とその正体を感知し，自覚する．その時に，M.T.ベネディクトは万人の霊魂の内に生得的に刻まれている「感知的曼荼羅」，つまり人類の「大我構造の骨格」(Higher Self Matrix)を感知していたと悟った』[15]．

新時代系の臨死体験中に出現する「キリスト」の教行証が非常に多いが，その主な教示は下記の通りである．

一．「神」と呼ばれる無位格的大霊知力は創世以前に無数の霊魂を創生し，その内の一霊であった救済的霊知(キリスト)が多数の人間的な輪廻転生を経てイェズス・キリストとして生きていた(E.Cayce 他)．

二．イェズスは最高の霊知力を修得し，他の諸霊の神格化を確実なものとするために「神」から特務を受けた個霊である(D.Oakfort 他)．

三．「キリスト」は死後で各人が有する文化的なイメージに合わせて，自分をこの人に現す(M.Tweddell 他)．

四．イェズスは死者を愛の恍惚で満たし，自分を巨大な光球に変容することもよくある(C.Mills)．

五．イェズスは臨死体験者と共に石器時代に移行した後，体験者の前生を共に回顧した(G.Wagner)．

六．B.エディは臨死体験中で無限に光り輝くイェズスと結合し，二人は一体となった．彼女は無上の愛と恍惚を覚えた．キリストは彼女の総罪を知っていたが，それは全く無意味な事柄であった．彼女はキリストが他の人々と同じように「神」と別個の存在であると悟った(B.Eadie)．

七．臨死体験者は「光の存在(キリスト)」に悪魔が存在するかどうかを尋ねたが，彼は『神はこんなことを許さない』と答えた(11歳の少女 Cecil)．

八．イェズスは臨死体験者に輪廻転生，又は先ほど離脱した死体に戻ることを選択させた(S.Rogers)．

九．イェズスの光が体験者自身を含む宇宙全体であると臨死体験者は悟った(T.Sawyer)．

十．天国で十字架に磔されたイェズスは愛の視線で臨死体験者を見つめていた(G.Landry)．

十一．地獄の恐ろしい生き物達に喰い裂かれていた臨死体験者は『イェズスよ，私をたすけて下さい』と切に叫び続けた．すると，突然，光が現れ，彼を地獄から救い出した．彼はこの光がイェズス・キリストであったと確信した(H.Storm 牧師)．

十二．臨死体験中で，『現世に戻ったら君に守護天使達を派遣する』とキリストは同性愛者に約束した．彼が健康になった後，キリストは彼を新しい同性愛者とめぐり合わせた(L.Dale の研究から)．

十三.臨死体験中にイェズスは『私の共同体を救うために私の再臨の時が近づいた』と R.エビーに教えた．R.エビーによると，キリストは1998年にこの世に生まれ変わり，無名の人として生きている(R.Eby)．

十四．新時代によると，キリスト教文化の影響を受けた臨死体験者は，「光の存在」をイェズス・キリストや死者，稀に「神」として感知するが，ヒンズー教徒や仏教徒他は，同じ「光の存在」を各々の宗教の光明界や死後界の支配者(閻魔大王他)として感知し，理解する．つまり，この「光の存在」は本来，一定した神格者や人格者ではなく，無位格的な存在として理解される．

更に，新時代の代表的な論弁家によると，人類の長い歴史の中で，神性の一次元に過ぎない救済的霊知が先ほど言及したようにアダム，セット，エノフ，ノア，アブラハム，メルヒゼデック，モー

ゼ，預言者達，そしてイェズスとして地上で生まれ変わって生きていた．それだけではなく，この救済的霊知は他の宗教で登場し，崇拝されているオシリス，ホルス，クリシナ，ラーマ，釈迦牟尼，老子，孔子，ヘルクレス，ヘルメス，オルフェウス，ザラツストラ，その父ゼント，アミリュス(沈没したと推定されるアトランタ大陸の神的英雄)，クェツァコアトロやマホメットのような多神仏として生まれ変りながら人類に救道を示した．現代に生きる文鮮明やサイババの如き新興宗教の教祖達，そして，諸種の交霊，呪詛，輪廻回顧体験等を司る霊媒師や神懸り師の如き者として生き，彼らの人生，秘伝の真知，啓示と秘儀を通じて人類に確かな救いの道を示すのである．彼らは「神」との霊知的な和一においてナザレのイェズスに等しい者であるが，この和一の力量，合致と利他的な愛善実施の徹底においてイェズスより右に出る者は未だいないと強調する新時代の弁論者が多い[16]．

K.ヴィリァムスは神知と正悟の唯一の源泉である諸秘伝が「キリスト的霊知」の人格的な化身である上記の者の本質的な同一性と諸活動における根本的な一致点を詳細に説述[17]するが，私はナザレのイェズスと次の六者たけとの同一性をまとめる．

人祖アダムの霊魂とイェズス・キリストの霊魂が本来無位格的な大霊力たる「神」の救済的霊知力の一燐光として同一者であるが，アダムの霊魂が救済霊知力の人格的な輪廻転生の初穂であるのに対し，イェズスの霊魂はその霊知力の最高の生まれ変わりであると新時代は主張する．この説によると，アダムとイェズスは「神が最初に生んだ子」,「神に象られて造られた者」,「神の御言葉」,「人の子」,「被造物の支配者」,「人類の父」他と呼ばれることによって彼らの同一性が立証される．更に，同じ聖書はアダムを「第一の人間」,「神に最初の生贄を捧げた者」他と見なし，又，イェズスを「第二のアダム」,「人々に永遠の命を与え，命の木に近付けた者」他として理解することによってこの二人の内面的で本質的な絆を一層明確にすると彼らは指摘する．亦，E.ケーイシーの聖書解釈と他界で得た啓示によると，人祖アダムが神に対して罪を犯した以上，当然この贖罪の義務も先ずアダムにあった．更に，同氏によると，ナザレのイェズスは罪人であるのではなく，アダムとして生きていた救済的霊知の一燐光が罪を犯したのである．従がって，この救済的霊知の一燐光は，神の正義と人間の理に適うため，罪とその罪科を賠償するため，そして自分と人類を永禍から救うために「自ら輪廻転生以外の道はなかった」ということで，イェズスとして生まれ変わり，罪を償い，自分と人類を神と再び和解させたとK.ヴィリァムスは論述する．

サレムの王であり，最高の司祭でもあったメルキゼデックとイェズス・キリストの霊魂は神から流出された救済的霊知の異なる生まれ変わりであり，メルキゼデックの霊魂がイェズスをして生きた霊魂の前生の一つである．K.ヴィリァムスが引用するクッムラン派の秘伝似非聖典の『メルキゼデック巻』中の「最後の祝祭」章によると，メルキゼデックもイェズスも「神の子」,「無上神の司祭」,「正義の君」,「平和の君」,「神から使命を受けた者」,「永遠を通じて存在する最高の司祭」,「聖祭を司る時にパンと葡萄酒を用いる者」及び「人々の救い主」と呼ばれる．そして，E.ケーイシーの霊魂が催眠中に身体を離脱し，「霊気界の記録堂」(Akashic Hall of Records)を訪れた時に下記の啓示を受けた．

『救済的意識（霊知）がアダム，エノク，エジプトに行ったヨゼフ，メルキゼデック他として生まれ変わり，最後にイェズス・キリストとして生まれ変わった．イェズスが復活することによってメルキゼデックと自分の司祭職を永遠で最高の価値あるものとして

公現した.…この救済的意識(霊知)の輪廻転生が人類精神の進化過程において画期的な出来事である』[18].

釈迦牟尼の霊魂も神聖で非位格的な大霊知力の救済的意識(キリスト)の一燐光であり，釈迦牟尼の霊魂がイェズスとして生きた霊魂の前者であった．両者の生涯において，主として下記の同一性が認められる．

(1) 釈尊はイェズスと同様に，処女から生まれ，王家の後裔であり，その誕生が星の出現によって公告され，二人とも貞節，寛容，慈愛と万人平等を教示し，山上で自分の姿を変容させた．

(2) 二人とも病人を癒し，小籠の食料で大衆を養い，水上で歩き，偶像崇拝を廃止し,「御言葉を蒔き」,「正義の国の到来を宣言した」.

(3) 釈尊も「罪を償うために死に,三日間地獄の苦しみを耐え忍び,再びこの世に戻り,身体をもって涅槃に入られた」.

(4) 二人とも「善き牧者」,「救世主」,「世の光り」,「無上の存在」,「永遠の者」と称せられる.

(5) 釈尊は皆の幸せを確固たるものとするために「弥勒仏」，そして,「死者を裁く者」としてこの世に生まれ変わって再臨する．イェズスも最後の裁判の為に再臨するであろうと信じられている.

更に，釈尊とイェズス・キリストの教示内容とその意味の同一性がこの二人の霊魂の同一性の証明として挙げられている．K.ヴィリァムス氏は明記する22箇所の内から一番大切な三つを挙げる.

〔1〕釈迦牟尼は『憎しみに満ちたこの世で憎しみではなく,愛だけがこの憎しみを滅ばすことが出来る.愛を以て瞋恚に打ち勝ち,善を以て悪を滅せよ.貧困を滅ぼし,真理を以て偽りに打ち勝て』(ダッマパタ,1.5)と教えていた.

イェズスも『あなた達は敵を愛し,自分を憎む人に善を行い,自分を呪う人々を祝し,自分を讒言(ざんげん)する人のために祈れ』(ルカ,6.27)と奨励していた .

〔2〕釈迦牟尼は『自分の命を危険にさらしながら我が独り子を守る母親のように,一切の存在に対して無限の慈悲を興せ.あなたの無辺際の慈悲心が全世界に及ぶように』(スッタ・ニパタ,149-150)と教示していた .

イェズスも『私が貴方達を愛したようにあなた達もお互いに愛し合うこと,これが私の掟である.友人のために命を与える以上の大きな愛はない』(ヨハネ,15.12-13)と教えていた .

〔3〕釈迦牟尼も亦『私の教えを堅く信じ,十分に私を愛する者は天上界,又は涅槃へ赴く者である』(マッジマ・ニカヤ,フフルゥヤ,22.47)と断言した.

イェズスも『私は復活であり,命であり,…私を信じる者は死んでも生きる.生きて私を信じる者は永遠に死なぬ』(ヨハネ,11.26-27)と示したのである.

紀元前2000年頃エジプトで祭られた天空神ホルスの霊魂とイェズス・キリストの霊魂とは同一の神的燐光の異なる生まれ変わりである．イェズスの霊魂がホルスとして生きた霊魂の後生的な化身である．K.ウィリァムス氏はホルスとイェズス・キリストの霊魂の共通点を次のように証示しようとする.

(1) ホルスの誕生がイェズスのように星によって明かされ，処女イシス・メリから12月25日に生まれ，飼い葉桶に寝かせられ，3人の賢者が彼を見舞い，少年として寺院内で教え，30歳の時に「洗礼者アヌブ」から洗礼を受け，12人の弟子に囲まれて教えを説き，人々の為にパンも増やし，山上で自分の姿を変容させ，エル・アザル・ウス(El-Azar-us)という男を生き返らせた.

(2) ホルスもイェズスと同様に「道」,「真理」,「救い主」,「神が使命された息子」,「人の子」,「御言葉」,「世の光」と「世の罪を取り除く神の子羊」等の称号で知られた.

(4) ホルスも“KRST”，つまり「神から任命を与えられた者」として崇められ，イェズスのように十字架

に磔にされ死に，廟に葬られたが，後に復活した．

ヒンズー教の救い主と見なされるクリシナもイエズス・キリストも梵（宇宙の霊魂）の同一の救済的霊知（キリスト）の燐光の異なる生まれ変わりである．K.ウィリァムス氏はこの二人の生涯において百を越える共通点に言及するが，19点だけを取り上げるに留まっている．私はこの内容を5項に集約する．

(1) クリシナはイェズスのように王家の後裔であり，少女デヴァキから生まれ，誕生の時に天使達が現れ，羊飼い達が訪れ，賢者が贈り物を献上し，川で洗礼を受け，弟子達の前で自分を変容させ，癩病等を癒し，死者を甦らせ，奇跡を行い，2人の泥棒と共に十字架に磔にされて死んだ．

(2) キリストと同様にクリシナを迫害しようとした王が数千人の赤ん坊を殺害するのを命じた．

(3) クリシナはイェズスと同じく死後に死者の国へ降り，生前の身体を以て復活し，昇天した．

(4) クリシナも「牧者なる神」,「諸君の主」,「贖罪主」,「罪の担い手」そして「普遍の御言葉」と称せられた．

(5) 二人共，三位一体的な「神」の第二の神格者であり，自分を「復活者」と「父への道」と宣言した．

ペルシアで紀元前600年頃から「光と真理の神」として崇拝され，イェズス・キリストの時代にもローマでも祭られていたミトラ神はイェズスの霊魂の前生的な化身であり，神の救済的一燐光の異なる生まれ変わりである．K.ヴィリァムス氏はミトラとイェズスに次のような同一性を見出している[19]．

(1) ミトラ神はイェズスのように12月25日に誕生し，12人の弟子を持ち,「派遣された者」(Messiah),「善き牧者」,「道」,「真理」,「贖罪主」,「救済主」と呼ばれ，多くの奇跡も行い，死後三日目に復活した．その記念祭は毎年春季に祝われた．

(2) キリスト教と同様に日曜日はミトラ神の祭日であり,「主の日」と呼ばれた．

(3) カトリックとギリシア正教のようにミトラ教徒も「主の晩餐」という儀式を行っていた．

多くの新時代論弁家，特にN.ノトヴィチ(N. Notovitch)，S.メックレイン(Shirley McLaine)，ジアネットとリチァド・ボック(Janet & R.Bock)，S.ババ(Sai Baba)とE.C.クレル・プロフェト(E.C.Prophet)他は，イェズス・キリストというユダヤ人が「イッサ」(Issa)という名を以て東南アジアの儒教と仏教の寺院で修行していたと主張する．それは戦争記者であったロシア人N.ノトヴィチ氏がインドとチベットを旅行した時にヒミス寺院で僧侶がチベット語で書かれた経典から読み，訳者がそれを訳し，ノトウィチがそれを記した文があると言うのである．この経典はイッサというユダヤ人がパレスチナでの公活動，十字架上の死と復活する以前に秘伝聖知を求めながらペルシア，インド，中国とチベットの寺院で秘儀等に励んでいたことを記したようである．更に，L.ドウリング氏が「霊気層の記録」から読み取ったところによると，イェズスは上記の諸寺院以外にユダヤ教の秘伝神知を修得した後，中国の有名な孟子の門徒として古典の研修に励んだようである．E.ケーイシーも同じ記録で呼んだところによると，イェズスは上記の研修以外，更にユダヤ教のエッセン神秘学派の一員として勉学に励んだ後，エジプトのヘリォポリスで病気治癒法，天気支配法と星占い等の超能力を体得したようである[20]．「人知学会」を立ち上げたR.シタイナーは地球を囲むと信ぜられる「霊気界」の記録を読んだ後，いわゆる「コルゴタ丘の神秘」が人類の救済史において決定的な出来事であると悟った．この「コルゴタ丘の神秘」とはイェズスとしてこの世で生き，活動していた「救済的霊知（キリスト）」が，イェズスの十字架上の死の瞬間に彼の身体を離れ，現世の感覚で絶対に把えられないが，地球と同一の位置をおさめる「霊気界」に

生まれ変わった．それは万代万人が自力で神的な位を獲得出来る為である．かくして，イェズスの傷から流れた血を単なる化学的液体ではなく，この血は「霊気化」した御蔭で霊気界に住ずる万有の原本を「救済」(神に成らしめた)した．以来，この救済的霊知(キリスト)がこの地球上で無数の偉人として同時に生まれ変わり死に変わり('mass incarnations')，今も我々を救済し続けている．これこそ，全人類の最終的で逆転不可能な救済である[21].

ところが，新時代の論弁家とその信奉者が主張するような汎神論的で神仏混合論的な「キリスト」観は使徒達の時代から今日に至るまでの正伝キリスト教と一切関係がなく，事実上で正伝キリスト教の教行信証，学問の精神とその客観性に悖る立場である．正伝キリスト教，特にカトリックとギリシア正教の神学的及び哲学的なキリスト論は昔も今も，正伝聖書に記されているキリスト自身の言葉(『大祭司がイェズスに向かい，その弟子と教えについて尋ねると，イェズスは答えられた，「私はこの世の人々に公然と話してきた．すべてのユダヤ人が集まる街道や神殿でいつも教え，隠れて話したことはない」』[22])と弟子達の多数の証言を考察すると，新時代が主張する「キリスト的秘伝」を正伝キリスト教の真正な教理として排斥しなければならない．特に宗教的，神学的及び哲学的な知識の基礎だけでも使徒時代から今日に至るまで公認されている新約聖書を偏見なしで読む者であれば，秘伝神知がキリスト自身によって秀でていた弟子達だけに直接で密かに伝えられ，使徒達と初代教会の信仰であり，最終的に秘伝福音書と秘伝黙示録として集録されたという新時代の主張が無根で虚説であると判る．又，イェズス・キリストの正体(性質)，生誕の神秘，完全な無罪性と贖罪的な人生，一回限りの受難・十字架上の死，死者界からの復活，昇天，世の完成時に一回限りの公審判の為に歴史的で同一のイェズス・キリストの再臨，唯一の贖罪主と救世主たるイェズス・キリストと万代万人の永遠禍福との関わりについて，キリスト自身，弟子達，初代教会の諸聖哲の信教とその根本教理を前篇の諸論著の中で既に詳説した．そして，使徒達と初代の正伝キリスト教が，キリスト論と密接な関係を持つ「神と諸霊の同性同質説」，「霊魂輪廻説」，「霊魂移住説」，「霊魂先在説」，「救済的霊知(キリスト)の多量転生説」と「人々皆は神々である」という説だけではなく，秘伝神知主義が押し進める「霊気界説」と「自力救済説」等も最初から一貫して全面的に斥いていた事についても既に説述した[23].

現代世界の精神風向に似ていた古代ローマ文明の多神教的風行と接しながら，その社会を改善しようと努めていたキリスト教が，キリストの神性と人間的な前代未聞性，使徒達の信教，聖書と使徒的正伝に悖る教説を斥きながら当時の哲学的表現を用いて自分の信教とその規範であるイェズス・キリストの性質を徐々に定義していた．不思議なことに，初代教会の時代と中世初期の異端説の大半は現代の似非自然科学，占術，汎神教的で進化論的な空論科学，他界間交信術等の主張とフリーメーソンの思索を含む各種の秘伝神知学を根拠とする「新時代」の混信に酷似する内容を持っている．信教自由の乱用，無神論的で進化論的な諸科学に因る真理の歪曲，自己栄利的・自己本位的な新興宗教の搾取と騙し，超絶神(天主)の赦愛と正義の誤解，天主の敵対視・蔑視や否認の現代風向，諸似非(えせ)宗教と新時代運動に対して，正伝キリスト教のキリスト観を明確にすることは人間的な良識の義務であり，大変有意義である．イェズス・キリストによって正信共同体の頭とその教行信証のまとめ役に任命された使徒ペテロ(『私を愛しているか…私の羊を牧せよ』[24])とその後継者たちと共にカトリッ

ク教会は，キリスト教の発生の時から今日に至るまで聖教真理の宝，特に正しいキリスト観をずっと堅持し，公示してきたのである．このキリスト観の大旨は有名なニケア・コンスタンチノープルという二つの公会議(AD.325と381年)で信条として議定され，今日に至るまで正伝キリスト教の教行信証の神髄であって「心」である．

『我々は信ず，唯一の主，神の御独り子イェズス・キリストを．主は万世の先に，父より生まれ，…真の神より真の神，造られずして生まれ，父と一体なり．すべては主によりて造られたり．主は我ら人類のため，又我らの救いの為に天より降り，聖霊によって乙女マリアより御体を受け，人となり．ポンツョ・ピラトのもとにて，我らのために十字架につけられ，苦しみを受け，葬られたまえり．…三日目に復活し，天に昇り，父の右に座し給う．主は栄光のうちに再び来て，生ける人と死せる人を裁き給う．主の国は終わること無し．（次に）我は信ず，…聖霊は父と子とより出で，父と子と共に拝み崇められる』[25]．

昔も今も正伝キリスト教の主流をなすカトリック教会とギリシア正教の義人と哲人は無宗教，汎神教，万信平等，正しい信行への無関心や秘伝神知教の立場ではなく，正伝の聖書，聖伝の教理，歴史的なイェズス・キリスト，その教行証と特にこのキリストへの誠実な愛を一貫して教示してきた．このイェズス・キリストの正体と2000年にわたる正教と正伝の理解が全世界の司教と神学者の公議の故に作成され，ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の公布認可を受けている『カトリック教会の公教要理』(“Catechism of the Catholic Church”の英語版)と日本語に訳され，日本カトリック司教協議会の認可ある『カトリック教会のカテキズム』(“Catechismus Catholicae Ecclesiae”)の中で丁寧に明示されている．更に，2000年に及ぶカトリック教会の教理(神学的・哲学的な理解)に反する様々な異端とそれに対するカトリックの立場がデンシンガー・シエーンメッツー両氏によって『カトリック教会文書資料集』としてまとめられている．以下，新時代，多神論，汎神論，唯物論，無神論，無信論と似非キリスト教のキリスト論に対するカトリックの立場を要約する[26]．

第一．新時代の論弁家によると，歴史的なイェズス・キリストの霊魂は創世以前に他の諸霊魂と共に「神」によって創生された後，人間界内で人種，人格と人体を変えながら霊的に向上発展する神自身の一燐光である．しかし，正伝キリスト教の神学と哲学はあらゆる霊魂の唯一無二性と単一性(成分が全く無く，不可分のこと)及び各自の人格と人体の唯一無二性を理由に，それらの先在，輪廻転生や複製(複生)を認めない．かくして，キリストは，超絶的な存在者である「三位一体」の第一の神格者，「御父」(Persona unica Patris)に因って，第二の神格者である「御独り子」(Persona unica Filii)が人類の唯一の救い主と贖罪者として派遣された．同一の三位一体の第三の神格者である「聖霊」(Persona unica Spiritu Sancti)の働きによって御独り子は神秘的な懐胎の瞬間に無原罪の処女マリアの胎内に宿った．彼はローマ皇帝アウグストの治世，ガリラヤのヘロデ大王の時代にマリアから人間的な魂と身体を受け取って個人イェズスとして一回限りでベツレヘムの町に生まれた．そして，ローマ人ポンツョ・ピラトがパレスチナの総督であった時に一回限り十字架上に死んだが，三日目に死者界から一回限り復活し，およそ四十日後昇天され，そして何時か，一回限りの公審判を行うために来られると正伝キリスト教は一貫して教示している．

第二．キリストは新時代等が言うように，宇宙万有を通徹する非位格的，非自性的で三次元的，又は多元的な大霊知力の一元，その理性，心，救済的な手本や救済的曼陀羅のようなものではない．

イェズス・キリストは三位一体の第二の神格者としての神質において「聖父」と「聖霊」と同じく永遠の神格者である以上，一切の隠顕的な世界とその万物の「主」であり，君主(Kyrios, Dominus, Lord)である．

第三．キリストは新時代諸派が主張するように，人祖アダムとして神に対抗して罪を犯し，人類を陥れた後，何度も何度も偉人として生まれ変わり死に変わり，秘伝神知を体得した挙句，自分の罪科を完全に賠償した者ではない．正伝のキリスト教によると，イェズス・キリストは人類を永遠の罪科(罪の罰)から解放し，人類に代わってその諸罪を贖い，万人に神福参加への道を示すために，三位一体の超絶神の無償恵愛と思し召しによってこの世に派遣され，微罪の影もない「御独り子」であり，人類の唯一の贖罪者と救い主である．

第四．正伝キリスト教によると，三位一体内の「聖父」の御独り子の懐胎は新時代他が説述するような「霊魂輪廻」や「霊魂移住」という過程内の一つの向上的な転生又は移居でなければ，同時多量受肉や同時多量の生まれ変わりでもなく，人間として一回限りの生誕である．キリストの懐胎によって御独り子の神性と聖母マリアから貰った人間性とが混合，融合，化合，消滅，分裂，解体や変性等の変化を蒙った事がなければ，御子の位格がイェズスの人格に変性したこともない．更に，この神秘的な懐胎の瞬間にイェズスの人魂とその能力が御子の能力に変成したことがなければ，御子性がイェズスの人魂に変化したこともない．イェズス・キリストにおいて御子の神性とイェズスの人間性とがお互いを碍たり，傷付けたり，打ち消したり，又は減力させたりすることなく，完全に保持されている．イェズスにおいて御独り子の神格とイェズスの人間性が極めて不可解，不可思議かつ不可分的な和一(単一の実体性，(unio unica, hypostatica et indivisibilis Filii; Prosopon)をなす．よって，イェズス・キリストは真の絶対神でありながら真の個人でもある．聖母マリアは全人類を救うために天から派遣された「聖父」の御独り子の人間的な母親であり，天主によって女性のなかから選ばれて最高の神恵を受けた者であり，唯一の救い主の母であり，「教会の母」であり，キリストに次ぐ栄光と権威を享受する者である．

第五．正伝キリスト教の超絶神の非現象界的で非物質的な三位一体性・位格性・純霊性・純一性・唯一無二性，更に人魂の被造物的な単一性と唯一性という哲学的及び神学的な立場から観ると，イェズス・キリストは，「新時代」の随従者が似非の臨死体験中に出会った仏陀，クリシナやミトラの如き多神教的や汎神論的な者，曼陀羅，原始的象徴，非位格的又は無位格的で「光」(霊知点一燐光)や心象等ではない．更に，イェズス・キリスト自身はタボル山上で自分を変容させた(マテオ, 17.1-9;マルコ, 9.2-8;ルカ, 9.28-36)が，そこに仏陀，クリシナ，ホルスやミトラなどのような神仏に変成しなかった．彼は復活後に様々な神祇や宗祖に変成し，弟子達を初め，自分の敵に現れたならば，どんなに世界を驚かしたであろうか．しかし，復活後もそういう変容，変成や顕現もなかった．

第六．正伝キリスト教によると，イェズス・キリストの全生涯，特に死者界から復活，昇天と再臨の約束は歴史における天主の無償恵愛，万代義人の最終的な救済とその栄光の前兆である．同時に，真正な宗教(愛天愛人の生き方)を拒んだり，軽視したり，無視したり，又は真理を乱用したり歪曲したりする人々の本心とその活動の実相を露顕し，彼らの回心と天主の恵愛による神福参加への招きである．

第七．更に，キリストが十字架上の贖罪的な死と三日目の復活によって永遠の地(苦)獄を絶滅さ

せたのでなければ，生涯を通じて拒天拒愛を貫いて死ぬ悪人の霊魂を永遠苦痛と絶望の心境を意味する「地獄」から無理矢理に救い，解放したのではない．キリストは死後に，生前中に天主を愛し，正善に努め，救いを待望してこの世を去った義人霊魂の世界を意味する「古聖所(limbo)」に降り，聖祖にのみ贖罪と救いを伝えたと正伝キリスト教は使徒の時代から今日に至るまで堅持している．キリストの死と復活後にこの世を去った者の救いも，愛天愛人又はその拒否で決まると正伝キリスト教は一貫して教示する．

第八．正伝キリスト教によると，キリストの復活は歴史的と同時に超現象的で一回限りの出来事であった．この復活はキリストの霊魂の生まれ変わりや移住でなければ，新約聖書が語るヤイロの娘，ナイム村からの若者やラザロの「甦り」(死界から現世に戻る)とは全く異なる．何故かと言うと，彼らはキリストの言葉によって現世に生還したが後に必ず死して二度とこの世に生きることはない．一方，復活したキリストの体は生前受難の痕跡を保持している身体であると同時に，時空的な制約を一切受けない永遠不死，不朽不苦と栄光の体である．キリストの復活は三位一体の天主の御業であり，キリストの神性，教行証の価値とその栄光を示す．更に，彼の復活と昇天は彼が貫いた無上の愛に対する御父の応報，彼が成し遂げた和解と新契約成立の公認であると同時に，人間となった御独り子の永遠君臨の開幕と人間性の「成聖化」(theosis)である．

第九．キリストの再臨も新時代の占術師，交霊術師，呪詛師や臨死体験者の如き者が預言する世の終末，それに伴うキリスト教的な価値観の衰滅，新時代が説く非位格的な救済(キリスト)的霊知の多量転生，善悪の宇宙的な大決戦(Star Wars)と全世界の破滅を意味するものではない．正伝キリスト教によると，「聖父」しか知らない時と方法で世の終わりが訪れ，同時にそれは万我物の完成の時となる．その時に，三位一体の天主，諸霊，諸善悪人と全世界の面前で真理が最終的に明かされ，人類の歴史の中でこの上もない決定的な出来事となる．この時にこの世が全面的に改新された上，義人に神福の永遠参加(天国に入り)が与えられる．同時に，拒天拒愛の生き方に因ってあらゆる時代，所と方法で他者を搾取し，騙していた悪人に対してイェズス・キリストは御父の御前で愛天愛人の掟を基準に上訴不可能な永遠不幸(神福参与のない永遠境遇)の審判を下すであろう．これこそ三位一体の天主の宇宙的な栄光の絶頂，救済的な恵愛の完成，キリストの正体の完全な公現，愛天愛人を生きた人々の至福と同時に「拒天拒愛」及びあらゆる偶像崇拝の生き方を誇りとした者達の本音と建前の結果の公現であろう．

第十．正伝キリスト教によると，イェズスの「東洋滞在説」の資料は確実性を欠き，その論理も支離滅裂である．何故かと言うと，幻覚的な体外離脱中に「霊気界」を訪れ，そこで得た知識や幻覚剤等の薬物服用下に行われる交霊会，呪詛会等の時に得た「悟り」が本当に真正な知識であろうか．グノスティックの最古福音書がAD.150年以降に編著され，その諸篇における物語の流れも食い違い，それより古いキリスト教の正伝聖典に矛盾する内容の方がどうして真正と見なされ，歴史的にもより確実で有ると何を基準に断定できるのか．例えば，孟子が紀元前289年頃に死んだのであれば，イェズス・キリストは彼の門弟として修行するはずはない．ヘロデ・アンティパスはエルザレムの王ではなかったにも拘わらず，どうして「霊気界の記録」と新時代の大預言者の超能力は彼を「エルザレムの王」としているのか[27]．更に，キリスト教を非難し排斥しようとする者(例えば，UKで

2006年に出版された「神は妄想である」の著者 Richard Dawkins)を初め，知名度の高い歴史家，神話学者や比較宗教学者(例えば Mircea Eliade)がどうしてこの説を取り上げていないのか．そして，私に言わせると，公私の生活において正邪，真偽，善悪，賞罰や諸行応報(因果法)等の秩序とその客観的な価値を否定し嘲笑する新時代他の随従者が，それをすることに因って邪正等の分別と判定の基準を放棄する．従って，これらの者は哲学的にせよ，科学的にせよ，客観的に不偏で正しい検証と論証及びそうでない検証と論証の分別と判定は出来ない．以上の事由でイェズス・キリストの東洋滞在説は荒唐無稽の説として斥かれる．

註

(1)　Norberto R.Carrera, “A Call to Vigilance”, (Pastoral Instruction on the New Age), 1996, in:http://www.ourladyswarriors.org/dissent/newage1.htm (pp.2-6)[03.VIII]. Pontifical Council for Culture & Pont. Counc. For Interreligious Dialogue, “Jesus Christ the Bearer of the Water of Life” (A Christian reflection on the ‘New Age’), 2003, in:http://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/interrelg/documents/rc_pc_inter…(pp.2-12)[03.VIII]. H.P. Blavatsky, “The Secret Doctrine (pp.215, 216, 220, 245, 255, 533)”, in:http://freemasonwatch,freeprees-freespeech/luciferquotes,html (p.2)[03.VIII]. “Official Site of A.R.E., Edgar Cayce” in:http://www.edgarcayce,org/edgar-cayce1.html (pp.1-3)[03.VIII]. “The New Earth - New Age MileniumProphesies”, in :http://www.thenewearth.org/index.html (pp.1-4)[03.VIII]. “New Age Lies”, in:http://www.cwo.com/-pentrack/catholic/newage, html (pp.1-3))[03.VIII].「新宗教事典」，井上順孝(編)，弘文堂, 1990, pp.176, 287-288, 290-292, 669, 737, 802, 921-922, 931. “Spiritual Frontiers Fellowship International”, HP, in:http://www.spiritualfrontiers.org/index.shtml (pp.1-2)[03.VIII]. Diane Brandon, “New Age Centers”, in:http://www.dianebrandon.com/links/newagecenters.html (pp.1-5)[03.VIII]. “Hermetic Order of the Golden Dawn” Official Website, in:http://www.golden¯dawn.com/temple/index.jsp (pp.1-3)[03.VIII]. Kevin Williams, “The mystical vision of Cabbalah〈by Joseph Kerrick〉”, in:http://www.near¯death.com/experiences/judaism05.html (p.1)[03.VIII]. Dale Robbins, “The New Age Movement - What Christians Should Know”, in:http://www.victorious.org/newage.htm (pp.1-4)[03.VIII]. EWTN, “The Age-Old New Age Movement”, in:http://www.bubleprobe.com/new_age.htm (pp.1-13)[03.VIII].『新宗教事典』，井上順孝編，弘文堂，1990, pp.102-383.

[特註] この論究の中にこれから言う,「天主」とは，多神教(神道的な八百万神)，汎神教(仏道の仏・仏性・法性・無量無碍光如来)，多神教的な汎神論(ヒンズー教の梵と神々，儒教の道・理・太極と神々)他の混合的信教の俗人と知識人が崇敬する自由知意のない無(非)位格的な存在・生命力・エネルギや現人神的指導者ではない．正伝キリスト教徒が敬愛し，礼拝する「天主」とは，それらと全く異なり，一切世界を超絶し，あらゆる神聖・神秘・善美と霊智等の極まりない徳力を本有する唯一無上の存在者であると同時に，一切世界の創造主であり，支配者である．イェズス・キリストの啓示に裏付けられている正伝キリスト教系の哲学と神学によると，この天主は「御ひとり」でありながら「御父・御子・聖霊」をして永存する．更に,「イェズス・キリスト」とは「御子」が歴史的なイェズスとして人類の唯一の「救い主(キリスト)」である．日本キリシタンの古くて良き伝承に従って「天主」，又は「創世主」,「超絶神」や「絶対神」という称号を用いることにする．

(2)　K.Williams, “The NDE and God. K.Williams’ research conclusions”, in:http://www.near¯death.com/experiences/research16.html (pp.1-4)[03.VIII]. EWTN, ibid., pp.6-7[03.VIII].

(3)　K.Williams, “Cayce on religion”, in:http://www.near¯death.com/experiences/cayce09.html (p.2)[03.VIII].

(4)　Pontifical Council for Culture &…, ibid., pp.l6, 19, 20-22. N.Carrera, ibid., pp.4-5, 7, 10. Christian Apologe-tics& Research Ministry(CARM), “What is the New Age Movement”, in:http://www.carm.org/nam/Whatis.htm (pp.2-4)[03.VIII].

(5)　K. Williams, “Edgar Cayce on consciousness”, in:http://www.near¯death.com/experiences/cayce04.html (pp.3, 6, 12-15. J.Van Auken の理解)[03.VIII].

(6)　Pontifical Council for Culture &…, ibid., pp.16, 21. Charles E.Rice, “50 Questions on the Natural Law”, Ignatius Press, [3]1999, pp.74-78[聖トマス，カトリック教会，哲学者 Peter Singer, 動物保権運動家 Ingrid Newkirk と幾つかの「運動」の人間と動物の理解についての見解].

(7)　Pontifical Council for Culture &…, ibid., pp.15-16, 19-21. N.R.Carrera, ibid., p.4. K.Williams, “Cayce on religion”, in: http://www.near¯death.com/experiences/cayce09.html (pp.4-5)[03.VIII]. “Official Site of A.R.E. EdgarCayce”, in:http://www.edgarcayce.org/about_ec/cayce_on_reincarnation/index.html (p.1)[03.VIII]. K.Williams, “Reincarnation and the Church”, in: http://www.near¯death.com/experiences/origen07.html (pp.1-18, 特に pp.3-8)[03.VIII]. J.Pereira, “Hindu Theology”, Motilal

Banarsidass, [2]1991, pp.53-408. 井原徹山,「印度教」，大東出版社，[3]1991, pp.53-531. 常盤大定,「佛性の研究」，国書刊行会, [4]1988, pp.36-590. 加藤精一,「密教の仏身観」, 春秋社, 1989, pp.1-445. 日本仏教学会編,「仏陀観」，平楽寺書店, 1988, pp.79-440. 勝又俊教,「真言の教学」，国書刊行会, 1981, 上巻, pp.246-260, 372-376, 445-466, 595-605, 856-887, 916-940, 992-998, 下巻, pp.651-668, 695-698.

(8) "Catechism of the Catholic Church〈略"CCC"〉", Libreria Editrice Vaticana, Second Edition, 1997, pp.13-24, 40-41, 54-105, 179-196, 473-490, 505-522, 618-637, 665-678.『カトリック教会のカテキズム』，日本カトリック司教協議会監・編，カトリック中央協議会出版，pp.17-29, 48-49, 67-121, 219-236, 578-597, 618-637, 808-823. 鹿児島女子大学紀要第39号(2004年)に掲載された『人毟の禍福的運命』，その一，「唯一神の根本徳力を詮く」，特に註47-54とその二，「唯一神と宇宙万有の性闡(せいこう)」という私論の章及び引用文献，特に註41-46まで.

(9) "CCC", ut supra. 紀要第38号(2003年)，『人毟の禍福的運命』，その一，「仏と万世千界の性闡(せいこう)」，第1章とその引用文献，特に註11-29.

(10) 紀要，第38号(2003年),『人毟の禍福的運命』，その一，「仏と万世千界の性闡」第2章とその文献，特に註30-40まで. そして註(7)に記されているヒンズー教徒仏教に関する文献も参照.

(11) K.Williams, "Cayce on the future", in:http: //www. near¯death.com/experiences/cayce11.html（pp.1-20）[03.VIII].

(12) K.Williams, "Edgar Cayce on religion", ibid., pp.2-3. 更に A.R.E. Of.Site, Edgar Cayce, "Edgar Cayce on the Christ Consciousness", in:http://www.edgarcayce.org/aboutec/cayce_on/christ/index.html（p.3）[03.VIII]. K.Williams, "Edgar Cayce on Conciousness〈by J.Van Auken〉", in:http://www.near¯death.com/experiences/cayce04.html（pp.2-3,10）[03.VIII]. K.Williams, "The NDE and Jesus.…ibid., pp.9-10.

(13) K.Williams, "The NDE and Jesus.…ibid., p.10.

(14) A.R.E. Of.Site, Edgar Cayce, "Edgar Cayce on the Christ Cons…", ibid., p.2. K.Williams, "Ressurrection and Reincarnation", in:http:// www.near¯death.com/experiences/origen09.html（pp.14-15）[03.VIII].

(15) K.Williams, "The NDE and Jesus. K.Williams' research conclusions", ibid., p.10. 英文は下記の通りである.

"Mellen-Thomas Benedict had a conversation with the light who kept changing into different figures, such as Jesus, Buddha, Krishna, mandalas, archetypal images and signs…. He then became aware that he was seeing humanity's'Higher Self matrix'-a mandala of human soul within each of us". 更に，K.Williams, "The NDE and Jesus - K. Williams' research conclusions", ibid.,（pp.1-13）(03.VIII) と (04.IV) 篇，pp.1-6, 8-11. K.Williams, "Dr Raymond Moody'sresearch", ibid., p.5. K.Williams, "Saved from Hell. Rev. Howard Storm's near-death experience - A rescue from hell by Jesus Christ", ibid., pp.1, 3. K.Williams, "The NDE and the Future - K.Williams' research conclusions", ibid., p4. K.Williams, "The NDE and Satan - K.Wiliams'research conclusions", ibid., p.3. Alexa という子ども「臨死」体験が http://www.nderf.org/alexande,htm（pp.1-3）(04.III)（この体験中にもやはり生前回顧があるが，善悪の識別とその評価が全くない）.

(16) N.R.Carrera, ibid., p.7(25条). Pontifical Council for Culture &…, ibid., pp.21-22, 29-31. K.Williams, "Edgar Cayce on religion", ibid., p.4. K.Williams, "Ressurrection and reincarnation", ibid.,(pp.1-5.著者はP.ノヴァク(P.Novak)氏の「認識分割論」が輪廻転生を裏付けていると主張する). K.Williams, "Edgar Cayce on Consciousness", ibid., pp.3-7. Ron Rhodes, ibid., Part 2, pp.9-11[04.I].

(17) K.Williams, "Near-Death Experiences and Afterlife - Past Lives of Jesus Christ", in:http://www.near-death.com/(Main Page)[2010.03]. K.Williams, "Adam: a previous reincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen041.html（pp.1-8）[03.VIII]. K.Williams, "Melchizedech: a previous reincarnation of Jesus", in:http:// www.near¯death.com/experiences/origen042.html（pp.1-11）[03.VIII]. K.Williams, "Joshua: a previousreincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen043.html（pp.1-3）[03.VIII]. K.Williams, "Buddha: a previous reincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/Experiences/origen044.html（pp.1-7）[03.VIII]. K.Williams, "Horus: a previous reincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen045.html（pp.1-2）[03.VIII]. K.Williams, "Krishna: a previous reincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen046.html（pp.1-2）[03.VIII]. K.Williams, "Mithra: a previous reincarnation of Jesus", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen047.html（p.1）[03.VIII]. K.Williams, "The reincarnation of Jesus" in: http://www.near¯death.com/experiences/origen04.html（pp.1-3）[03.VIII]. Pontifical Council for Culture &…. ibid., pp.29-31.

(18) K.Williams, "Melchizedech: a previous reincarnation of Jesus", ut supra. 更に，アダム，ヨシュワ，ミトラ，ホルス，仏陀とクリシナに関する資料を参照.

(19) K.Williams, "Reincarnation and the Church", ibid., pp.1-18. K.Williams, "The Christian doctrine of reincarnation", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen07.html（pp.1-24）[03.VIII]. K.Williams, "Christian reincarnation history", in:http://www.near¯death. com/experiences/origen08.html（pp.1-14. 特にE.C.プロフェットが著した "Reincarnation: The Missing Link in Christianity", "The Lost Years of Jesus", "The Lost Teachings of Jesus", "Path to the Universal Christ" という書物の中身とその出典に注目）[03.VIII].

(20) Ron Rhodes, ibid., Part 2,pp.1-9.

(21) Ut supra, Part 1, pp.4-5. R.ローデスはイエズス・キリストの東洋滞在説の無根と不合理性を解明する.

(22) 『聖書』(新約篇), ibid., p.168(ヨハネ福音書, 18.19-21).

(23) 《Ⅰ》カトリックの立場から観た場合. 私著『人毟の禍福的運命』, その四の「キリストの贖罪的人毟, その復活とクリスチャン」と「唯一神と人間の栄光」. 更に,『人の死と死後の禍福』, その二の「使徒教会による死と死後界の理解」. そして, 聖書』(新約篇), ibid., pp.156, 270-272, 342-343(ヘブライ人, 9.13-10.13), 362-363(1ペトロ, 3.18-4.19). "CCC"ibid., p.264.『カトリック教会のカテキズム』, ibid., p.305. デンツィンガー・シェーンメッツアー, ibid., p.96. Catholic Com., "Reincarnation", in:http://www.catholic.com/libraryl/reincarnation.asp(pp.1-4)[03.VIII].
《Ⅱ》新時代唱道者の立場から観た場合. K.Williams, "Reincarnation and the Church", ibid., pp.1-18. 更に, K.ウィリアムス氏は "Reincarnation and the early Christians", in:http://www.near¯death.com/experiences/origen06.html(pp.1-18)[03.VIII] という論考の中で非キリスト教である秘伝神知教の教典が正伝キリスト教の真の教典として紹介され, 初代キリスト教と教父達が神と万霊の同性同質説, 天霊謀叛と悪魔の自力救済説, 霊魂輪廻転生説, 人魂先在説と霊魂移住説を認めていたかのように論じられている.「秘伝神知教の教典」と呼ばれる書物は下記の通りである.

[A] 五つの福音書.　(1) マルコによる秘伝福音書　(2) トマスによる秘伝福音書
(3) トマス優勝者の書　(4) フィリッポによる秘伝福音書　(5) ヨハネ秘伝書

[B] 五つの黙示録.　① ヤコブの第一黙示録　② ヤコブの第二黙示録
③ アダムの黙示録　④ ペトロの黙示録　⑤ パウロの黙示録

[C] 新時代信奉者の多くはいわゆる「霊気界記録堂」への「心霊旅」とそこで得た秘伝的神知を自他言行の真偽判定の規準とする.

(24) 『聖書』(新約篇), ibid., pp.29(マテオ, 16.18-19), 174(ヨハネ, 21,15-17). "CCC" ibid., pp.227-237.『カトリック教会のカテキズム』, ibid., pp.267-278. "The Catechism of Trent〈Article Ⅸ〉", in:http://www.cin.org/users/james/ebooks/master/trent/tcreed09.htm (pp.1-12)[03.VIII].

(25) "CCC" ibid., pp.49-50(The Nicene Creed).『カトリック教会のカテキズム』, ibid., pp.58-59(ニケェア信条).

(26) 各々の教理の内容, その理解及び異端に対する立場を "CCC",『カトリック教会のカテキズム』とデンシンガー・シエーンメッツーの『カトリック教会の資料集』を参照. "The Catechism of St.ThomasAquinas〈The Ⅱ&ⅢArticle〉", in: http://www.cin.org/users/james/ebooks/master/aquinas/acreed02.htm(pp.1-5, そして, acreed03.htm)[03.VIII]. "The Catechism of Trent〈ArticleⅡ-Ⅷ〉", ibid., pp.art.II(1-7), art.III(1-6), art.Ⅳ(1-9), art.V(1-8), art.VI(1-5), art.VII(1-6), art,VIII(1-6).『神学大全』, ibid., vol.3, pp.39-354(特に pp.142-165, 196-202, 301-324). John Paul II, "Jesus gave his life as a ransom for many", in:http://www.cin.org/jp2/jp980204.html (pp.1-3)[03.VIII]. デンツィンガー・シェーンメッツアー, ibid., 古聖所と地獄に関する説明, pp.5-10, 76-77, 112, 167, 223, 273, 282, 398-399. カトリック以外からの批判も参考にした : Computers for Christ, "The New Age Movement, An Overview", in:http://www.believersweb.org/view.cfm?ID=568 (pp.1-8)[03.VIII]. Jeremiah Project, "Seven Major Teachings of the New Age", in:http://www.jeremiahproject.com/prophesy/newage01.html (pp.2,4-5)[03.VIII]. EWIN, "The Age-Old New Age Movement", ibid., pp.7-9.

(27) Ron Rhodes, ibid., Part 2, pp.11-14. 万有百科大事典, 小学館, vol.4, p.578.

主 な 使 用 文 献

キリスト教関係

BIBLIA SACRA (Vulgata), 2vls.	Deutsche Bibelgesellschaft		[4]1985['69]
Catechism of the Catholic Church (CCC)	Holy See	Lib.Ed.Vaticana	[2]1997['94]
カトリック教会のカテキズム	日本カトリック司教協議会	カトリック中央協議会	[2]2002[同年]
カトリック教会公文書資料集	デンシンガー他(編)	エンデルレ書店	1974
The Sources of Catholic Dogma [Enchir.Symbl]	"Denzinger" (trnsl.Roy J.Deferrari)	Loreto Publ.	[3]2007['02]
Jesus Christ the Bearer of the Water of Life	Pontif.Counc. for InterrelD	Vatican Publ.	2003
A Call to Vigilance	Norberto R.Carrera	in:http://www.ourladyswarriors.org /dissent/newage1.htm (pp.2-6)[03.VIII].	
Charles E. Rice	50 Questions on the Natural Law	Ignatius Press	[3]1999

仏教関係

仏性の研究	常盤大定著	国書刊行会	[4]1988[‘73]
仏陀観	日仏思想研編	平楽時書店	1988
菩薩観	日仏思想研編	平楽時書店	1986
全訳正法眼蔵５篇（含前巻要約）	中村宗一他	精神書房	[18]1990[‘71]
Shobogenzo 4vls	K.Nishiyama trsl	Nakayama Shobo	[5]1986[‘75]
正法眼蔵啓廸上中下巻	西有穆山著	大法輪閣	[14]1990[‘65]
教行信證講義全３巻	山邉習學と赤沼智善	法蔵館	[11]1985[‘52]
密教の仏身観	加藤精一著	春秋社	1989
真言の教学上下	勝又俊教著	国書刊行会	1981

「新時代運動」（NAM）関係

“New Age”（NAM）　http://en.wikipedia.org/wiki/New_Age

“New Age Spirituality”　http://www.religioustolerance.org/newage.htm

Edgar Cayce’s　A.R.E.（Association for Research and Enlightenment）.　http://www.edgarcayce.org/

Kevin William,　“Near-Death Experiences and the After-Life”.　http://www.near-death.com/

J.& Jody A. Long 他, “Near Death Experience Research Foundation”（NDRF）　http://www.nderf.org/

“Out of Body Experience Research Foundation”（OBERF）　http://www.oberf.org/

“After Death Communication Research Foundation”（ADCRF）　http://www.adcrf.org/

Diane Corcoran 他, “The Intern. Assoc. for Near-Death Studies”（IANDS）　http://www.iands.org/

“New Thought Movement” HP.　http://websyte.com/alan/

世界規模の主な「新時代運動」団体：

諸種の「秘伝神知や秘伝秘儀」の組織（Theosophic Societies），秘密諸結社（Freemasons），人知学会（Anthroposophic Society），奥義学校（Arcane School），新時代思想（New Age Thought），「イセィレン共同体」（Esalen Community），スコトランドのファインドホーン共同体（Findhorn Cmmunity），ニュ・ヨーク市の「オープン・センター」（Open Center），「精神最先端の国際同胞会」（Spiritual Frontiers Fellowship International），スイスの「モンテヴェルデ共同体」（Monteverde），「創価学会」と「公明党」（Soka Gakkai and Kometo P.Party, A Japanese Buddhist Neo-religious Organization and its Political Organization），「世界基督教統一神霊協会」（統一教会，The Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity）.

下記個人の主なウェブサイトとホームページ：

E.キューブラ・ロス（Elizabeth Kubler-Ross），J.バルハム（J.Barham），J.V.オーケン（J.Van Auken），S.マクレイン，G.リッチ（George Ritchie），PMH.アトウォテル（PMH.Atwater），D.ブリンクリ（Dannion Brinkley），N.ダゥゲルティ（Ned Dougherty），N.スプルギン（Nora Spurgin），M.T.ベネディクト（Mellen T.Benedict），B.イディ（Betty Eadie），R.エル（Richard Eby），A.フェニモル（Angie Fenimore），R.ムーディ（R.Moody），K.リング（Kenneth Ring），M.モース（Melvin Morse），G.ラドナヤ（George Radonaia），H.ストーム（H.Storm），B.クリム（Benjamin Creme），M.ニュートン（M.Newton），B.ベタルツ（Betty Bethards），E.C.プロフェット（E. Clare Prophet），S.マックレィン（Shirley McLaine），J.C.リリ（John C.Lilly），C.ルンダ（Craig Lundahi），D.ブランドン（Dianne Brandon），B&J.グゲンハィム（Bill and Judy Guggenheim），T.レーリ（Timothy Leary），R.ゲーリング（Randy Gehling），B.マルツ（Betty Malz），M.メブリュク（Muhhamed Mebruke），H.ピトマン（Howard Pittman），S.パウェル（Sarah Powell），D.ロセンブリト（Daniel Rosenblit），L.チョキー（Lingza Chokyi），E.ダルハム（Elaine Durham），C.ユング（Carl Jung），G.ランドリ（Gerald Landry），D.モッリセイ（Dianne Morrissey）．彼らは，「新時代」と新興宗教の新真理の優れた伝達方法である臨死体験，体外離脱体験，諸占術（手相占い，占星術，占土術等），降霊術，交霊術（神懸り，霊懸かり），諸々の魔術と呪詛術及び死後界の研究に優れた功績を持ち，権威ある専門家としてお互いを自称している．同時に「新時代運動」の最先端に立つ唱道者であり，信奉者でもある．彼らの殆どは上に言及した「秘儀会」と何らかの形で関わっている者達である．Kevin William（http://www.near-death.com/）and Jeffrey P.& Jody A. Long（http://www.nderf.org/）のウェブサイト内で彼らについての豊富な情報が見つかる．

Resume.

The World of NAM's Polytheistic Pantheism

～ A Catholic Theological Evaluation ～

This paper contains an outline of the fundamental and crucial doctrines of the NAM's theology and christology; their evaluation from the Catholic orthodox perspective; and a very concise reference to the Buddhist fundamental doctrines. The fundamental tenets of NAM can be summarized as follows :

1. The followers of NAM reject the canonical scriptures and almost all doctrines of great monotheistic religions, especially those of Catholicism and substitute them with ancient and modern esotericism, polytheism, pantheism, panentheism, deism, theosophism, anthroposophism, pseudo-scientific relativism, spiritualistic fake prophesies or even Satanism.

2. To obtain and deepen a "new revelation" (an esoteric enlightenment) and secure the efficacy of natural or spiritual powers for themselves, they don't hesitate to resort to all sorts of esotericism, parapsychology, spiritism, sorcery, hypnosis, counterfeit communication with spirits, necromancy, enchantment, occult rituals, "rebirthing", remote viewing, channeling, pseudo-Zen, mind control, "attuning", Feng Shui, sham healings, illusory NDEs, OBEs, NBEs, UFO encounters or ADCs, etc. They claim the reliability, validity and veracity of revelations obtained during those "practices", even when induced under influence of hallucinogens or other drugs.

The paramount doctrinal differences between the NAM and Catholicism can be summarized as follows :

(1) Catholicism and some other orthodox branches of Christianity uphold the faith in the Absolute, Metaphysical, Transcendent, Loving, Moral and Triune Divine Persons. The NAM's adherents argue for the non-personal or apersonal, immanent, amoral and non-transcendent yet spiritual character of 'Cosmic Energy", 'Pure Universal Consciousness', 'All-embracing Being of Light', 'Boundless Numinous Void', 'Zero Point of All Existence'.

(2) The newagers advance a hypothesis that *"the Universal Consciousness brought forth Its companions, individual creatures which share in Its life.... So within the Great Universal Consciousness many individual points of consciousness were awakened and given freedom... some poits separated from the Universal Consciousness,... entered the Earth environment,... took on the material bodies and evolved into human beings"* [E.Cayce, J.Van Auken]. Thus, the whole creation is meant to be the *'God exploring Itself'* through every imaginable way in an ongoing and progressive development of all beings (Divine Evolution). This stands in apparent conflict with the orthodox Christian dogma of creation of the Cosmos by the Most Holy Trinity "ex nihilo Suoi et subiecti", where no creature will ever become God or equal to God.

(3) The NAM denies the divine personality of Jesus Christ, the unique incarnation of the Second Divine Person ('Persona Filii') as historical Jesus and his life free even of the shadow of any sin. Instead, they maintain that :

(a) The 'Christ Consciousness' (Christic Pattern) had been created before the creation of material world with all the other 'spirits', which later evolved into the souls of human beings.

(b) The 'Christ Consciousness' in its first human incorporation as 'Adam' is the very author of human "original sin" and thus, they say, it had a moral obligation to atone for it.

(c) The same 'Christ Consciousness' had been reincarnated many times in the course of human history (Amelius, Melchizedech, Buddha, Hermes, Krishna ...and finally as Jesus of Nazareth). Jesus became the highest example of individual self-deification (individual salvation). Most of newagers are convinced that the same Christ Consciousness had again been reincarnated in the human form on Earth in 1998, most probably in the USA, the most enlightened nation on earth.

(4) The NAM rejects as absurd the Christian orthodox doctrine of the expiatory, sacrificial and redemptive character of Jesus Christ's life, especially the eternal value of his crucifixion, death, resurrection, ascension to Heaven, the second coming for the final and universal judgment and the unrepeatable character of those events.

(5) The newagers uphold that Jesus, called the Christ, beside the public teachings had left the special and secret 'Esoteric Teachings', which are essentially identical with Gnosticism, Mithraism, all sorts of syncretistic esoterism, Pantheistic Polytheism and Panentheism. All those doctrines determine NAM's ideals and life.

(2010年11月30日　受理)